

■ 2026年度 入試問題分析シート ■

北海道大学

前期日程

科目	生物
----	----

総 括	試験時間	2 科目 150 分	難易度(昨年比)	難化	昨年並	易化
	満点(配点)	数学重点:100 点(50 点×2) 物化生重点:150 点(必 100 点、他 50 点) 総合科学/学部別入試:150 点(75 点×2)	分 量(昨年比)	増加	昨年並	減少

〈総 論〉 昨年と同じく、生物基礎からの分量が多く、動物の発生・進化系統分野からは今年も出題がなかった。 ページ数・設問数ともに昨年度と大きな変化はなかったが、解答しやすい設問が多かったため、全体としてのボリュームはやや減少した。記述量も少なく、長文の論述問題は今年もなかった。やや細かな知識問題の出題も散見されたが、昨年度より易化とした。 〈特記事項・トピックス〉 ・ ページ数はやや増加した (21→22) が、設問数 (35→33) は減少した。 ・ 字数指定のある設問が減少した (6→5) が、どれも字数は短い (30～50 字)。 ・ 教科書の本文中にはないが、図などに示されている細かな知識問題が出題されている。 ・ 4 年続いていた古典的な遺伝の計算問題の出題はなかった。 〈合格への学習対策〉 昨年度から一転してかなり取り組みやすい問題が大半を占めた。例年、やや解釈に困る設問もあるが、それほとんど見られなかった。ただし、このような平易な問題だけで構成される入試が続くとは考えがたいため、昨年度並みの難易度の入試に対応できる対策が必要であると考えます。 日頃から教科書にある生命現象の理解を徹底した上で、問題文を正確に解釈し、問われていることに的確な解答を作ることを心がけておくことが重要である。						
---	--	--	--	--	--	--

設問ごとの分析

問題番号	出題形式	範 囲	分野・テーマ	特徴(内容分析・解答上のポイント)	問題レベル
1	記述 選択 正誤	生物基礎	恒常性	問 5 成長ホルモンの作用については、多くの教科書で本文中になく、図や表などにわずかに記載されている程度であり、タンパク質の合成促進作用についても触れていない教科書もある。 問 8 1 型・2 型糖尿病について理解していることを前提とした問題。	やや易
2	記述 選択 正誤 計算	生物	代謝 遺伝子	I 問 3 複合的にデータを見て計算する問題だが、難しさはない。 II ABC モデルの理解を前提とした問題。	標準
3	記述 選択 正誤	生物	遺伝子	問 2 遺伝子 X・Y はヒト細胞がもつ遺伝子で、これらの遺伝子を「発現させるため」のプラスミドである。 問 5・もとの実験とは異なり、プラスミドに遺伝子 Y をつないで強制的に発現させていることに注意する。 ・ 導入する遺伝子の向きについては 2019 年度前期に同様な問題が出題されている。	標準
4	記述 選択 正誤	生物基礎 生物	生態系	問 3 判断根拠には、問題文に書かれた内容をまとめたが、木材生産のための人工林では、節のない木材をつくる目的で林冠部から下の枝はすべて切除する「枝打ち」が行われるため、結果として林冠部にのみ葉が集中する。	標準

「問題レベル」は、本大学・学部を志望している受験生の入試レベルを基準に、問題の難易度を 5 段階〔難・やや難・標準・やや易・易〕で判断しています。昨年対比ではありませんので、総括の難易度(昨年比)とは連動しません。